

【学年別分科会 協議内容（一部抜粋）】

3歳児

<幼児の姿>

- ・「見せて」「いいよ」のやり取りを幼児同士がしていた。その姿を見てさらに周りの幼児も巻き込んでのやり取りがされていた姿から「協同性」を感じた。
- ・自分がしたい遊びをしっかりと楽しめている、それぞれの遊びが保障されていることが友達に興味をもつことにつながっている。
- ・伸び伸びできるからこそ、協同性が育つ。

<教師の援助>

- ・協同性を育もうとするとつなげたくなるけど、あえてつなげないことで、一人一人の思いを出せるようになるのではないか。
- ・一人一人を教師が見ている。つなげない保育を意識するからこそ、教師を中心に幼児から幼児へつながっていく。
- ・3歳児にとって、教師の存在はとても大切。先生がいるからこそ、したい遊びを楽しめている。
- ・一人一人が大事にされ、満たされている。この経験が他者にも優しくできることにつながるのではないか。
- ・最初から幼児に任せのではなく、教師のきっかけづくりが大切である。
- ・子どもが心を動かすには、教師の関わり方も大切である。
- ・一人一人の思いを教師同士が伝え合っていた。
- ・教師同士が連携しているからこそ、遊びも発展している。
- ・ピザカッターをつくる幼児が先生に見せる→先生がその姿や完成したものを認めて、他の教師に伝える（連携）→聞いた教師は「しているところが見てみたい」と声を掛ける→周りの幼児が「○○くんみたいにつくりたい」という思いをもつきっかけとなっていた。

<環境の構成>

- ・“つなげない”は3歳児にとってはとても大切である。
一人一人がしたいことを見付け、取り組み、実現できている。幼児は知らず知らずのうちに友達に気付き、関係がでていく。そのためには、したいことを実現できる環境がたくさんあることが大切である。3歳児でも使えるものがたくさんある。
- ・環境づくり（本物がある、身近に必要なものがある）ことで、好きに遊べたり、教師と安心して遊べたりする。そうすることで協同性につながると思った。

4歳児

<4歳児で見られた「協同性」>

- ・側にいる友達がしていることを気にする姿
- ・幼児同士で言い合うときに、相手の言葉を聞く姿
- ・一緒に遊んでいる友達が難しそうにしているとさりげなく手伝う姿
- ・友達に教えてもらったことを、3歳児にも同じように教えてあげようとする姿
- ・ボールを蹴る友達に、蹴ってはいけないこと（転がしドッジボールの遊び方）を教える姿
- ・友達が困っていると心配したり、教師に知らせに行ったりする姿
- ・いざこざの場面において、「じゃんけんをしよう」等と方法を提案して、自分たちで解決させようとする姿
- ・積み木の貸し借りの場面では、本当は渡したくない気持ちを表しながらも、友達にその思いを受け止めもらうことで譲る姿
- ・店屋ごっこで店員不在時に、コーヒーを買いに来た客に、代わりにつくる姿

<教師の援助>

○知らせる

- ・他児がしていることを、周りの幼児も知ることができるようする。

○引き出す

- ・互いが意見や思いを伝え合うことができるようする。

○仲立ち

- ・幼児同士が同じイメージで遊ぶことができるようする。

○代弁する

- ・互いの思いや考えを知ることができるようする。

○補う

- ・見守りながら、幼児の思いや考えが伝わっていないときに伝わるようにする。

○教師も一緒に

- ・困ったことがあったときには、幼児と一緒に考える。ときには提案してモデルとなるようにし、幼児同士で考えていけるようする。
- ・見守るか一緒にするか、見極める。（自分たちでしてみようと思えるように、声を掛け過ぎない）
- ・教師が側で見守っていたり、一緒に遊んだりする（教師の存在がある）ことで、自分達でやってみようと思えるようする。

<環境の構成>

- ・違う遊びをしている友達のしていることに気付ける（見ることができる）場所に、遊びの場を構成する。
- ・段ボールの囲い等で周りを囲うことで、友達と遊んでいる一体感や仲間意識をもつことができるようする。
- ・ワゴンによる移動販売等で園内を自由に行き来することで、異年齢の友達と関わることができるように道具を用意する。

5歳児

<幼児の姿>

- ・しっぽ取りでは、人数が違って「しない」という友達がいた時に、その幼児の思いを汲み取って、人数の調整をしたり、話をしようとしたりしていた。
- ・「客に来てほしい」という思いに向かって、お客様が来てくれるような工夫を友達同士で話し合っている。
- ・パン屋では「○○がいるよね」と必要なものを相談しながら決めて遊びを進めていた。
- ・宝石づくりに困っている幼児に、違う遊びをしている幼児が「こうしたらいいんじゃない」と提案していた。

<教師の援助>

- ・どの意見も否定するのではなく、話をつなぐ、幼児の意見に共感する援助をされていた。
- ・もぐらたたきの遊びでは幼児同士がイメージを共有できるように話を整理する関わりをするとともに、最後は幼児たちで話をして決めることができるような関わりをされていた。
- ・マクドナルドのドライブスルーのイメージを幼児から引き出しながら、完成して使うまでの意識のすり合わせをしていた。それでも教師が出すぎず絶妙だった。
- ・幼児の言葉にならない思いを教師が言葉にすることで、幼児の気付きになっていた。
- ・一つの遊びの場に関わりながらも、それぞれの遊びの場の様子も見守っていた。
- ・振り返りの際に教師が、イメージがわきやすい言葉を使ったり、イメージの共有がしやすい言い方をされたりしていた。
- ・振り返りの場面では、教師が幼児の話を引き出したり、まとめたり、比較しどう改善していくかを幼児たちに投げかけたりしていた。

<環境の構成>

- ・遊びに必要な道具が自由に使えるようになっていた。
- ・材料や道具が様々に用意されていることで幼児が思いついたことをすぐに試したり、してみたりできる環境になっていた。